

●口上

日本洋画史における1913年
ヘタウまの源流としての反官フォーヴ

西欧美術における1913年は主情主義から主知主義への転換点であり、ドイツの表現主義グループ「ブリュッケ」の解散と、カンディンスキー、モンドリアン、マレーヴィチらの抽象絵画の創始が象徴的である。では日本の1913年（大正2年）はどうであろうか？ 萬鉄五郎が「裸体美人」を発表し、岸田劉生、斎藤與里らが「日本的フォーヴ」の魁となったフェウザン会を結成したのが1912年で、翌1913年は同会解散の年に当たる。急進的画家たちによる文展第二部（洋画部）を二科制とする建白書の提出は1913年だが、当局に拒否され在野団体として二科会が設立されたのは翌1914年である。「1913年は情から知への転換点」という仮説はひとまず措き、反官要素を併せ持つ主情主義としての「日本的フォーヴ」の最初の高まりとして1913年前後の時代をとらえるならば、そういえば私にも言いたいことがあった。

私は歴史法則主義の立場であり、循環史観論者である。日本現代美術史としては批判的に語られがちな1950年代後半の「アンフォルメル旋風」と、サブカルチャー文脈なため日本現代美術史には組み入れられていない1980年代前半の「ヘタウま」は、反アカデミズム的主情主義エネルギーの噴出として同一直線上に並んでいる。さらにそれらの源流として、1910年代の「日本的フォーヴ」を考えるのだ。西洋受容と模倣の問題、東洋アイデンティティと南画と書画とグラフィック、繰り返される「ヘタ」と「生」の論争ほか、さまざまなテーマが見えてくる。

もともとこのLESSONという会では、「1913年という時代をよりリアルに感じるため、1913年以降のことには触れない」を原則としていたとのこと。しかし主催者側のほうから私に、「中ザワさんのときにはこの原則を破ろうと思っています」と申し出てくださった。ご高配に感謝します。2008年現在、美術界はヘタウまの対極であるマネリスムの全盛期だが、であるからこそ、やがて到来するであろう第四の「反官フォーヴ=ヘタウま」を占いたい。

●プログラム

- 第一部 概論：歴史法則主義の立場から「日本的フォーヴ～アンフォルメル～ヘタウま」を連結する
- 第二部 詳論：日本洋画史における1913年を「フェウザン会解散、二科制建白書、新南画動向」からヘイゲイする
- 第三部 雑論：「ヘタと生」「帝国主義と東洋」「梅原とホッパー」「新旧論争と色彩派」「情から知、時代/作家」他

●自年譜

中ザワヒテキ（なかざわ・ひでき）

美術家。1963年新潟生まれ。千葉大学医学部卒。1983-89年、アクリル絵画。1990-96年、バカCG。1997-2005年、方法絵画。2006年以降、本格絵画。2000年1月1日、詩人松井茂、音楽家足立智美の立ち会いで「方法主義宣言」を発表。著書「近代美術史テキスト」「西洋画人列伝」「現代美術史日本篇」。特許「三次元グラフィックス編集装置」「造形装置および方法」。CD「中ザワヒテキ音楽作品集」。

辻惟雄「日本美術の歴史」pp.378-379 <萬鉄五郎「裸体美人」1912>「これはゴッホやマチスの感化のあるもので半裸の女が赤い布を巻いて新緑の草原に寝ころんでヘイゲイしている図」

経緯…メンバーのはがさんが僕の回顧展を見て、作風が主情主義から主知主義へ転換しているように見えたことが、打診いただいた理由のひとつ（らしい）。

2008年12月13日(土)14-19時

始まりのあいさつ	14:00-14:05
第一部	14:05-15:15
休憩（ドリンクタイム）	15:15-15:30
第二部	15:30-16:40
休憩（ダンランタイム）	16:40-16:50
第三部	16:50-18:00
食事	18:00-18:50
終わりの記念撮影	18:50-19:00

